

記憶の哲学：エピソード記憶と記憶概念

櫻木新 (Shin Sakuragi)

芝浦工業大学

記憶の諸概念と記憶の哲学

本稿の主題は我々の日常的な記憶理解（概念）と実際の認知機能との間のギャップである。分析哲学の伝統において広く受け入れられてきた三種の記憶（経験記憶・命題記憶・手続き記憶）は”remember”および関連の記憶表現の目的語の種類に呼応して提唱され、我々が日常的に記憶事象を記述するのに用いる概念の分類である。他方で、心理学における記憶の分類は主に我々の認知活動における機能やそれを実現するシステムの違いといった観点から行われる¹。

これら二つの異なる記憶分類は説明対象となる事象やその概念的 content について大まかには呼応しているが、厳密には一致するものではない。本稿は心理学的な説明と哲学的記憶概念との微妙な関係/相違を検討することを通じ、現代の記憶の哲学の中心問題の一つの概観を得ることを目指す。

記憶の因果説と心理学的な知見の微妙な関係

20 世紀の記憶に関する分析哲学上の主要な議論はほぼ記憶の概念分析に関連するものであった。Martin and Deutscher によって最初に哲学的に洗練された形で提唱された痕跡説 (trace 理論) は哲学のみならず、心理学にも大きな影響を与えることになる。しかし”Remembering”²の書き出しを見れば、彼らの論考の焦点が記憶事象の解明よりも、日常的記憶概念の分析にあることが理解できる。彼らは我々の記憶についての我々の日常的な表現がある種の因果性を含意することを指摘し、それを”the existence of some sort of trace, or structural analogue of what is experienced”³を仮定することで説明しようとしているのである。

心理学は他方で、我々のエピソード記憶が過去の経験の再表象を”structural analogue”の保持によって実現しているかを疑うべき理由を示してきた。Boundary extension や Observer memory と呼ばれる現象においては、思い出される経験の表象内容はおおよそその仕方さえ、そもそもの経験の内容の”structural analogue”とは言い難い要素を含む。もちろん、これらの一種の「捏造」を含む再表象は確かに過去の出来事を相当程度正しく表象していることが通常である。もしこれが実際の我々の記憶であるとすれば、エピソード記憶の機能は過去の経験表象の保持ではない。実際 Tulving はエピソード記憶を一つの独立のシステムとする立場を捨て、過去と未来の

¹ See M. Werning and S. Cheng, “Taxonomy and Unity of Memory,” *The Routledge Handbook of Philosophy of Memory*, ed. S. Bernecker and K. Michaelian, 2017, pp. 7-20, and S. Sakuragi, “On Philosophical Concepts of Memory,” *Lo Sguardo - rivista di filosofia*, N. 28, 2019, pp.285-299.

² *Philosophical Review*, 1966, pp. 161-96

³ *ibid.*, p. 189.

表象を「構成する」機能 (Mental Time Travel) の一部とする立場を提唱する。この立場によれば、エピソード記憶は過去に向かう Mental Time Travel であり、将来の出来事の想像 (未来に向かう Mental Time Travel) と本質的に同じ認知的機能である。哲学においても Michaelian や De Brigard に代表されるシミュレーショニスト達は古典的な因果説をあきらめ、そもそも記憶現象は過去の特定の経験と現在の表象の間の因果関係を要求せず、システムとして多かれ少なかれ世界を正しく表象するシステムの存在によって記憶現象を説明する方針を取る⁴。

これらの記憶機能の構成的役割を認める立場が正しく、Martin and Deutscher の因果的直観が正しいとすれば、我々の直観的記憶理解に由来する経験記憶の概念はエピソード記憶を実現する認知機能を正しく捉えたものではない。これに対して Werning に代表される痕跡説を支持する哲学者たちは、Martin and Deutscher の背景にある言語的な直観を維持しながら、痕跡のあり方の再検討を通じて様々な記憶事象の説明を試みる⁵。記憶の再構成という経験的事実に対して、それでも因果説を支持する直観の一つとして”remember”が示す事実性 (factivity) という特徴をあげることが出来る。少なくとも英語において、誰かが過去の出来事を”remember”するという主張が正しいとみなされるのは、その出来事は実際に起きていた時に限られる。これは”know”などの一部の動詞に認められる事象で、”hope”や”imagine”には認められないため、特に記憶と想像が同一の機能によって実現されると捉える立場から、記憶にのみ認められる事実性をどう説明するかが課題となる。Werning が主張するような最小限の因果関係の擁護は、再構成という経験的事実と言語的直観の間のバランスをとる一つの方策だといえよう。

記憶による捏造は、記憶の因果性のほかにも、記憶経験が示す特徴的な意識の存在 (the feeling of pastness) の再検討や不正確な記憶表象の指示内容と存在論的位置づけの問題など、様々な問題を引き起こす。本稿ではこれらの問題を概観しながら、日常的な記憶概念と記憶事象の間のギャップに光を当てる。

⁴ K. Michaelian, *Mental Time Travel: Episodic Memory and Our Knowledge of the Personal Past*, The MIT Press, 2016, and F. De Brigard, “Is memory for remembering? Recollection as a form of episodic hypothetical thinking,” *Synthese*, Vol. 191, 2014, 155-185.

⁵ See, for example, M. Werning, “Predicting the Past from Minimal Traces: Episodic Memory and its Distinction from Imagination and Preservation” *Review of Philosophy and Psychology*, 2020, pp. 301-33.